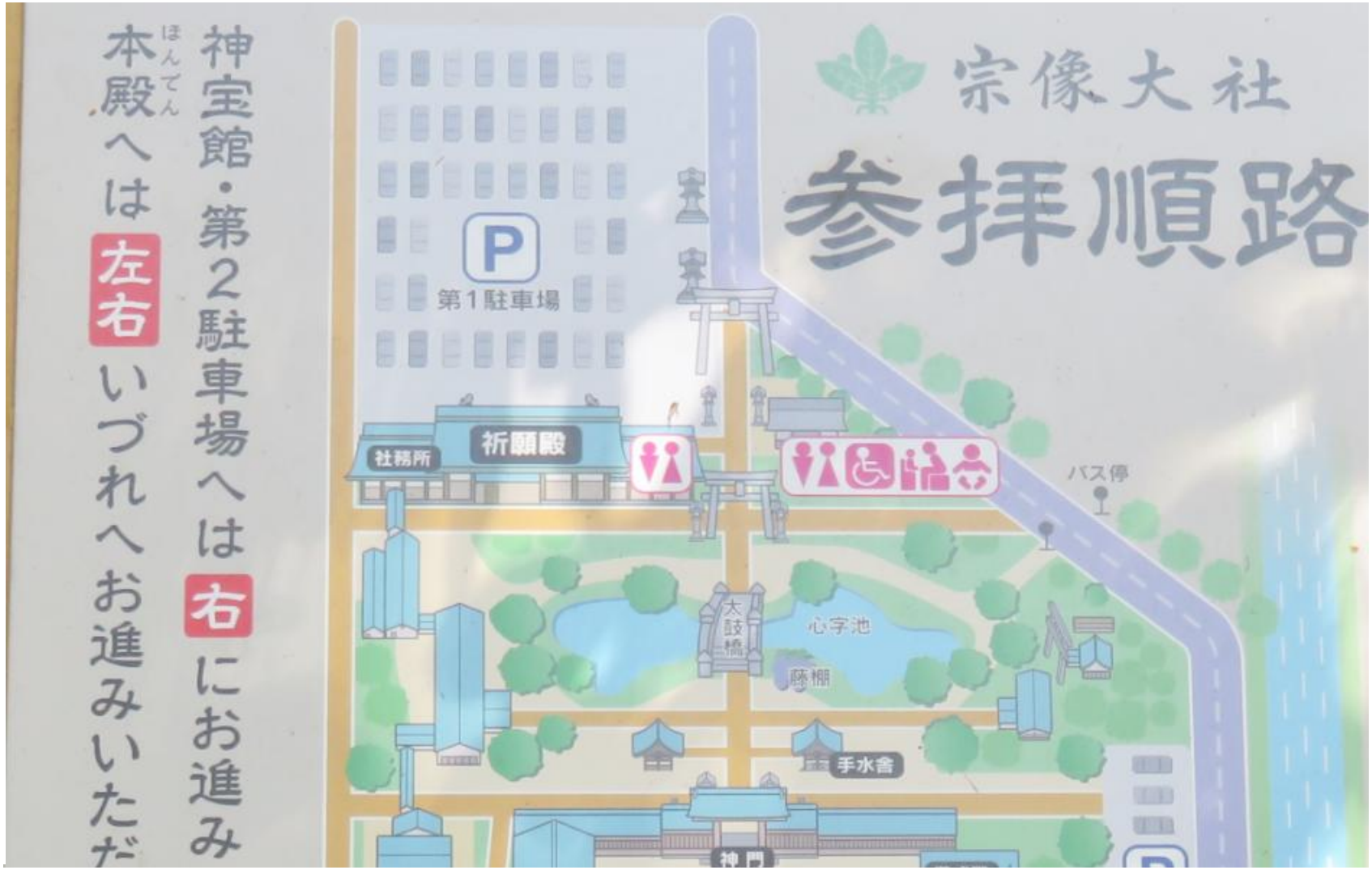
宗像大社（宗像市）

正面が宗像三女神の一柱である市杵島姫神が祀られている田島（本土）に所在する辺津宮の最初の鳥居

ここから参道を進む

ここから進む
↓


宗像大社
参拝順路
神宝館・第2駐車場へは右にお進み
本殿へは左右いづれへお進みいただ
第1駐車場
社務所
祈願殿
バス停
太鼓橋
心字池
藤棚
手水舎
神門

宗像大神（宗像三女神）は沖ノ島の沖津宮（田心姫神）、大島の中津宮（湍津姫神）、田島の辺津宮（市杵島姫神）に祀られ、三宮を総称して宗像大社と云うが、一般的にはこの田島の辺津宮を宗像大社と呼んでいるようだ

二つ目の鳥居/説明坂や標柱が立っている

史跡 宗像大社境内
文部省

史跡　宗像大社境内

宗像大社は沖津宮、中津宮、辺津宮の三宮からなり、宗像三女神を奉斎している。

ここに祀られる宗像大神については、記紀、風土記にも詳らかにのべられており、沖津宮のある沖ノ島からは、古墳時代から平安時代にかけての貴重な祭祀神宝（国宝）が多数出土している。

また宗像大神を奉祀する宗像氏は古代の有力な氏族であり、中世には院庁、鎌倉、室町両幕府らと関係をもち、戦国記にもその地位を守り抜いた豪族であった。

旧境内の概要は、現存する天正六年（一五七八年）の造営絵図により想定できるが、現境内もなおよく当時の形状を保っている。

文部省

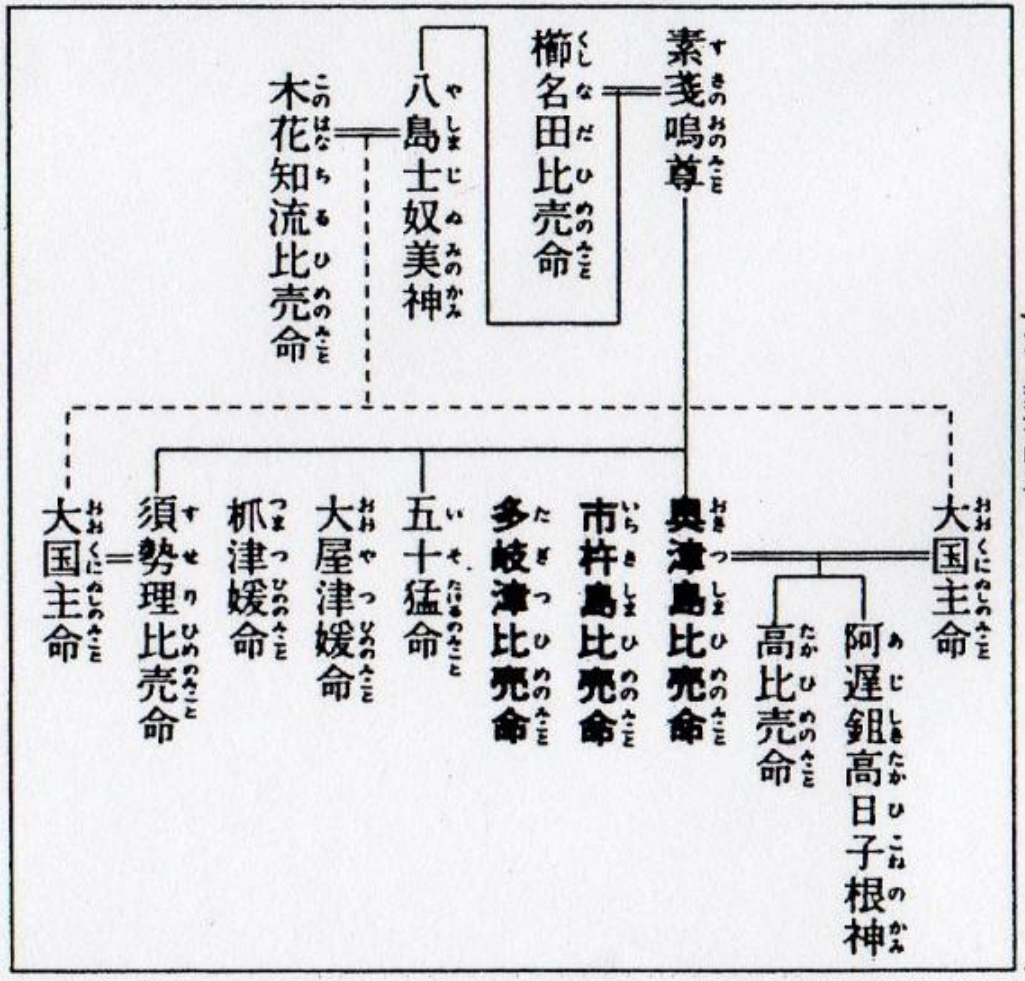
昭和四十六年四月二十二日指定

献燈

〔宗像三神〕

奥津島比売命 市杵島比売命 多岐津比売命

戸籍謄本―奥津島比売命、市杵島比売命、多岐津比売命。
本籍地―高天原。族―天神族。出生地―高天原。
寄留地―福岡県・宗像神社、広島県・厳島神社、神奈川県・江ノ島神社、その他各地の宗像社を称する神社。
職業―海上運輸業。
夫―(奥津島比売命)大国主命。
子―(奥津島比売命)阿遅鉏高日子根神、高比売命。
父―素戔嗚尊。



阿部正路監修『日本の神様を知る事典』日本文芸社より

そこから振り返って最初の鳥居方向を見たところ/この軸線に沿って玄界灘方向に中津宮そして沖津宮がある

辺津宮、中津宮そして沖津宮が直線上に並ぶ

ちなみに、これは田島（本土）から大島へ向かう定期船の港から中津宮の所在する大島を見たところ

世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群は宗像大社沖津宮（1.沖ノ島、2.小屋島、3.御門柱、4.天狗岩）、5.宗像大社沖津宮遙拝所、6.宗像大社中津宮、7.宗像大社辺津宮、8.新原・奴山古墳群の8カ所で構成される/この大島の向こうに沖ノ島がある

世界遺産を目指す

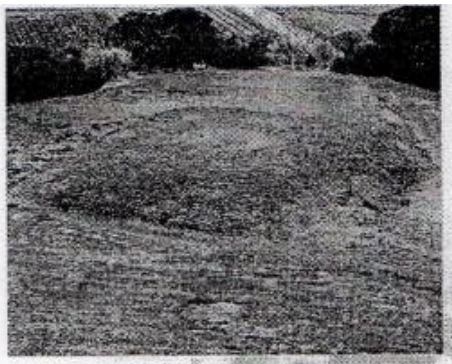
新原（しんばる）・奴山（ぬやま）古墳群

福津市北部の勝浦・奴山に所在する新原・奴山古墳群。平成28年1月27日、日本政府は新原・奴山古墳群を含む「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の世界文化遺産推薦書をユネスコ（国連教育科学文化機関）に提出しました。今後は関係者とよりいっそうの連携を図りながら、平成29年夏の登録に向けて取り組んでいきます。

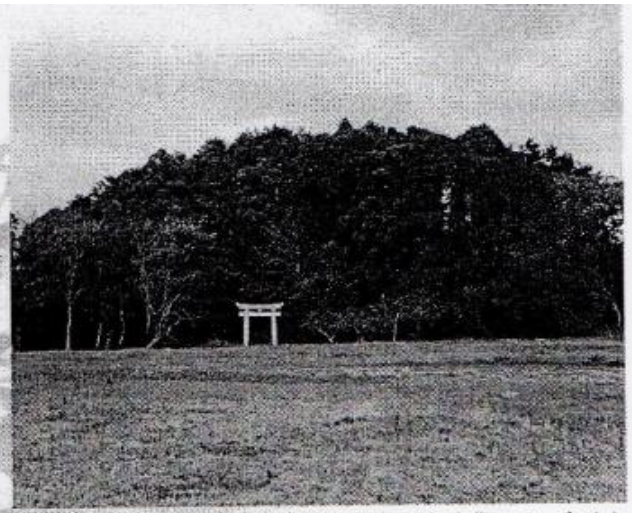
新原・奴山古墳群

海を越えた交流に従事し、沖ノ島祭祀を担った古代豪族の宗像氏が、5世紀から6世紀にかけて築いた古墳群。かつての入海に面した台地上に前方後円墳5基、円墳35基、方墳1基の計41基の古墳が良好な状態でのこされています。

古墳の立地する台地上からは、大島、さらに沖ノ島・朝鮮半島へと続く海を一望することができます。新原・奴山古墳群は沖ノ島に対する信仰を支える宗像氏の存在を証明する遺産です。



7号墳 5世紀前半に築かれた一辺24ｍの宗像地域には珍しい方墳です。墳丘上には玉砂利が敷かれ、コハクの原石や沖ノ島と共通する鉄斧が発見されています。

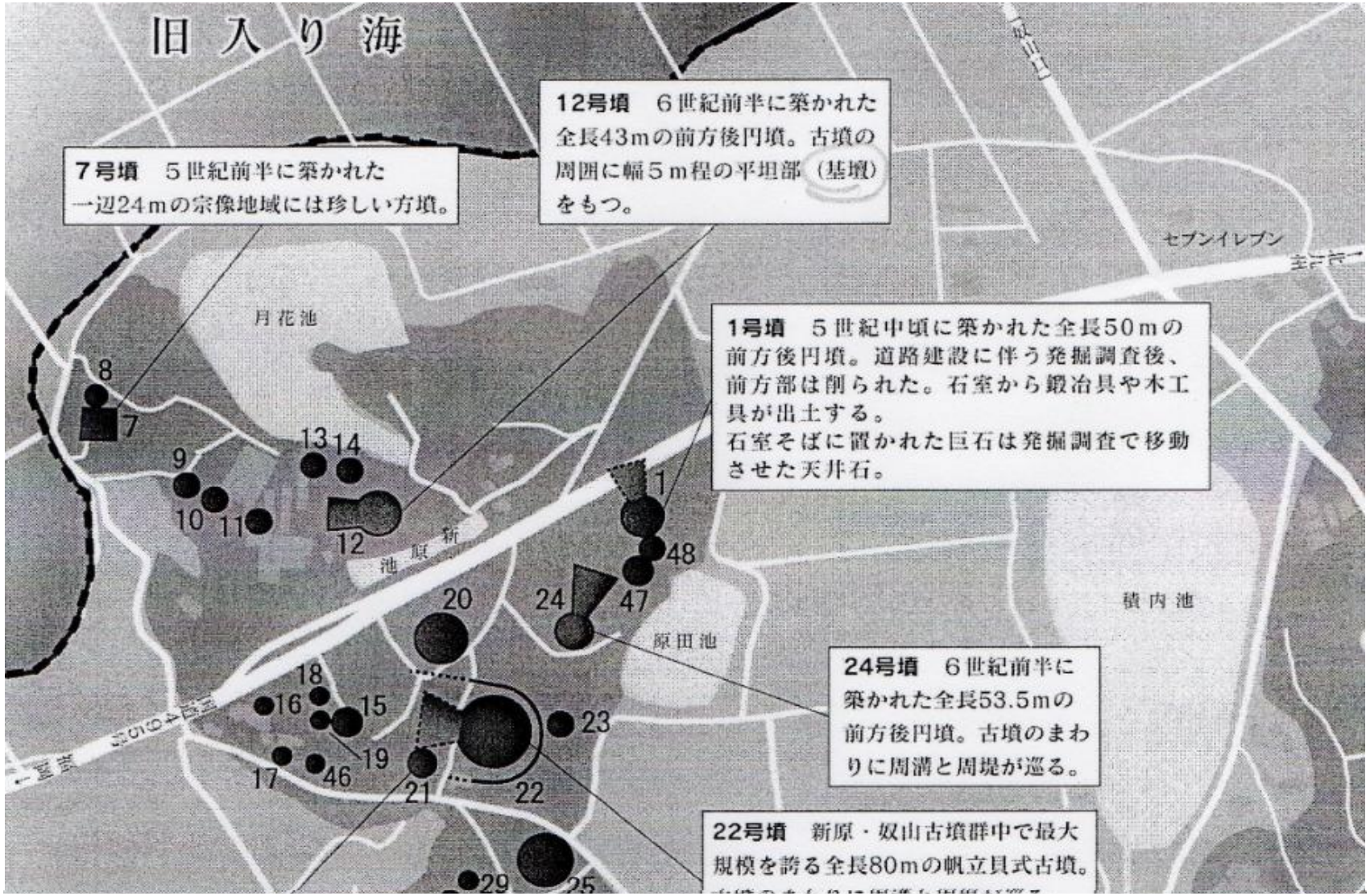


22号墳 前方部は開墾によって今は残っていませんが、大きな円墳に短い前方部が付いた形、上空から見た形から「帆立貝（ホタテガイ）式古墳」と呼ばれます。新原・奴山古墳群中で最大規模を誇る全長80ｍ。古墳のまわりに幅10ｍ程の周溝と周堤が巡っています。また墳丘に円筒埴輪が立っていました。

12号墳 6世紀前半に築かれた全長43ｍの前方後円墳です。古墳の周囲に幅5ｍ程の平坦部があり、基壇と考えられています。

30号墳 6世紀中頃に築かれた全長54ｍの前方後円墳です。前方部の上面は畑により削られ平らになっていますが鍵穴形をしたきれいな平面形を残しています。

平成30年度大東文化大学春季オープンカレッジ「世界遺産と関連遺跡・資料をめぐって」より


旧入り海
7号墳　5世紀前半に築かれた一辺24mの宗像地域には珍しい方墳。
12号墳　6世紀前半に築かれた全長43mの前方後円墳。古墳の周囲に幅5m程の平坦部（基壇）をもつ。
1号墳　5世紀中頃に築かれた全長50mの前方後円墳。道路建設に伴う発掘調査後、前方部は削られた。石室から鍛冶具や木工具が出土する。
石室そばに置かれた巨石は発掘調査で移動させた天井石。
24号墳　6世紀前半に築かれた全長53.5mの前方後円墳。古墳のまわりに周溝と周堤が巡る。
22号墳　新原・奴山古墳群中で最大規模を誇る全長80mの帆立貝式古墳。
セブンイレブン
月花池
新池原
積内池
原田池
8
7
9
10
11
13
14
12
1
48
47
24
20
18
16
15
19
17
46
21
22
23
29
25

平成30年度大東文化大学春季オープンカレッジ「世界遺産と関連遺跡・資料をめぐって」より

さて、参道を更に進むと太鼓橋が架かり、その前方に神門が見える

正面は神門

御祭神について

当大社は天照大神の御子神[illegible]
[illegible]心[illegible]
[illegible]津姫神[illegible]
宗像島姫神（辺津宮）

の三女神が日本書紀に伝えられて、ゐるように天孫降臨に
さきだち天照大神の御神勅を奉して鎮座されました。
この九州北辺の要衝の地に三柱の女神が勅祭された
意義はまことに尊く、道主貴（[illegible]）御別称が示すように
国民道の祖神として歴代の皇室を守護され国家
鎮護の御神徳を発揚され今日に至っております。
また古くから皇祖天照大神をおまつりする伊勢神
宮に対して重要な勅祭社三をはじめ国民の
崇敬も厚いお社です。宗像大神とおまつりする
神社は全国に六千余社ありますが、当大社はその
総本宮であります。

宗像大社々務所謹誌

神門の奥に拝殿が見える

神門の扉/宗像大社の表紋として「菊の御紋」が利用されている

神門から振り返って太鼓橋方向を見たところ

前方が拝殿

神額が掲げられている

拝殿の奥が本殿/市杵島姫神（いちきしまひめのかみ）を祀る

奉助天孫而
為天孫所祭
貞愛親王書

振り返って神門方向を見たところ

右手の外に出て拝殿から本殿方向を見たところ

本殿・拝殿とも重要文化財となっている

国指定重要文化財 本殿・拝殿

宗像三宮の総社である辺津宮は往古より「第一宮」と呼ばれ、全国約六二〇〇社の宗像神を祀る神社の総本宮です。現在の本殿と拝殿は、約五百年前の弘治三年（一五五七）の焼失により再建したものです。

本殿は戦国時代真っ只中の天正六年（一五七八）時の大宮司第八十代宗像氏貞公が、拝殿は本殿再建の十二年後の天正十八年（一五九〇）毛利元就の三男で「毛利両川」の一人として知られ、当時の筑前国の領主であった小早川隆景公によって再建されました。本殿・拝殿ともに国の重要文化財に指定されています。

平成二十五年には屋根及び社殿塗装の修復が実施され、同二十六年十二月八日には遷座祭を斎行しました。

本殿

五間社両流造　柿葺

五間とは建物の横幅のことで一間が六尺（約一、八メートル）です。流造は屋根が流れるような曲線を描いた建築様式で、前後対称ではなく後ろより前が長い神社独特の工夫がなされた美しい建物です。全体の構造は豪壮で、戦乱の時代に建立されたとは思えない程優美な姿は、桃山時代初期の特色がよく表わされています。

拝殿

切妻造妻入　柿葺

切妻とは屋根を四方ではなく、左右二面に本を伏せたように葺き、前後を切り落としたような様式で、妻入とは妻側に入口を設けて正面とする造りです。全体的な印象は簡素且つ雄大です。

本殿の側面を見たところ

ここにも表示があった/本殿は、最後の大宮司となった宗像氏貞によって、拝殿は小早川隆景によって16世紀末に再建されたらしい

左手が拝殿、右手は神門

正面が拝殿、左手が本殿

これは儀式殿

これらは末社

末社由緒

本殿を囲んで二十二の社殿に一二一の末社が鎮まっております。現在の社殿は延宝三～四年（江戸時代前期）にかけて整備されたもので、その由緒は古代の律令制度の時代にまで遡ります。大化の改新（六四五）により公地公民となりますが「神郡」と定められた地域のみ、神社の私有が認められました。神郡は全国の有力神社七社（伊勢神宮①内宮②外宮③安房神社④熊野大社⑤鹿島神宮⑥香取神宮⑦日前・国懸神宮⑧宗像大社）にのみ許され「八神郡」と称されました。九州では唯一宗像のみが神郡と定められ、その「神郡宗像」内に祀られた各神社を集合奉祀したものが、現在の末社群です。神郡宗像の領域は現在の宗像・福津両市を中心に、遠賀・鞍手・粕屋郡の一部にまで及び、各地域に鎮座した「七五末社一〇八神」といわれる神が、宗像大社を総氏神と仰いだ信仰を今に伝えています。尚、佐賀県の一部など中世に宗像大宮司家が領有した地域の神も分祀され続けたため一二一社に至っています。現在も各地域に鎮まっている神社がほとんどですが、なかには時代の経過とともに祭祀が営まれなくなり、もとの鎮座地が不詳となった神社も、この末社群にはございます。

さて、前方は第二宮（右手）と第三宮

第二宮/沖ノ島にある沖津宮の田心姫神（たごりひめのかみ）が祀られている

第三宮/大島にある中津宮の湍津姫神（たぎつひめのかみ）が祀られている

第二宮・第三宮

宗像三女神のうち、長女神（沖ノ島）と次女神（大島）は遥か玄界灘洋上に鎮座されており、往古より総社（中心となる神社）である当地・辺津宮を「第一宮」と称し、その境内地に両宮の御分霊をお祀りしてまいりました。そして第二宮と第三宮まで詣でれば、沖津宮と中津宮まで、つまり宗像三宮を拝したと信仰されてきました。

宗像三女神は「古事記」「日本書紀」にある通り、天照大神と素戔嗚尊との誓約の際に、天照大神の息吹より誕生されました。

現在の社殿は、その格別の由緒を以って宗像三女神の御親神を祀る伊勢神宮より、第六十回神宮式年遷宮に際し下賜されたものです。

我が国最古の建築様式である「唯一神明造り」で昭和五十年五月に移築されました。

第二宮御殿内

御祭神

第二宮　田心姫神（長女神）沖ノ島・沖津宮の御分霊

第三宮　湍津姫神（次女神）大　島・中津宮の御分霊

祭礼日

月次祭　毎月一日・十五日　午前十時～

※四月一日、十月一日は大祭に準ずる

春季大祭　四月二日　午前十一時四〇分～（総社祭後、引き続いて奇行）

秋季大祭　十月三日

新年祭　一月一日　午前九時二〇分～（総社祭後、引き続いて奇行）

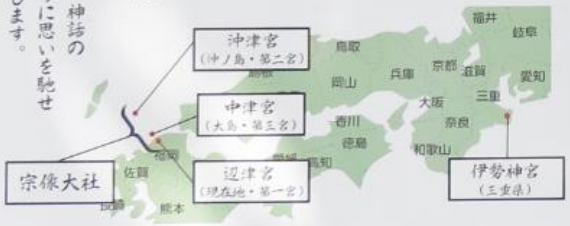
伊勢神宮と宗像大社

天照大神は皇室の御祖先神であるとともに、全国津々浦々の各ご家庭で神宮大麻（「天照皇大神宮」のお札）が奉斎されておりますように国民の総氏神として、伊勢神宮（三重県）にお祀りされています。

伊勢神宮は「神宮」と申し上げるのが正式名称で、三重県伊勢市に鎮座する皇大神宮（内宮）、豊受大神宮（外宮）と呼ばれる二つのお宮（「正宮」ともいいます）をはじめ、別宮、摂社、末社、所管社一二五もの宮社からなり、その総称が「神宮」となります。

正宮に次ぐお宮である別宮は、伊勢市とその近郊に十四あり（内宮十、外宮四）、当大社の第二宮・第三宮の社殿は、皇大神宮（内宮）別宮である「伊佐奈岐宮」と「伊佐奈弥宮」の旧社殿です。

伊勢の息吹を感じていただきながら、神話の時代より連綿と継承される我が国の祈りに思いを馳せながら、お参りいただきましたらと存じます。



三重県伊勢市に鎮座される「伊佐奈岐宮」と「伊佐奈弥宮」
写真左より、伊佐奈岐宮、伊佐奈弥宮、月読宮、月読荒御魂宮（写真提供＝神宮司庁）

宗像大社社務所

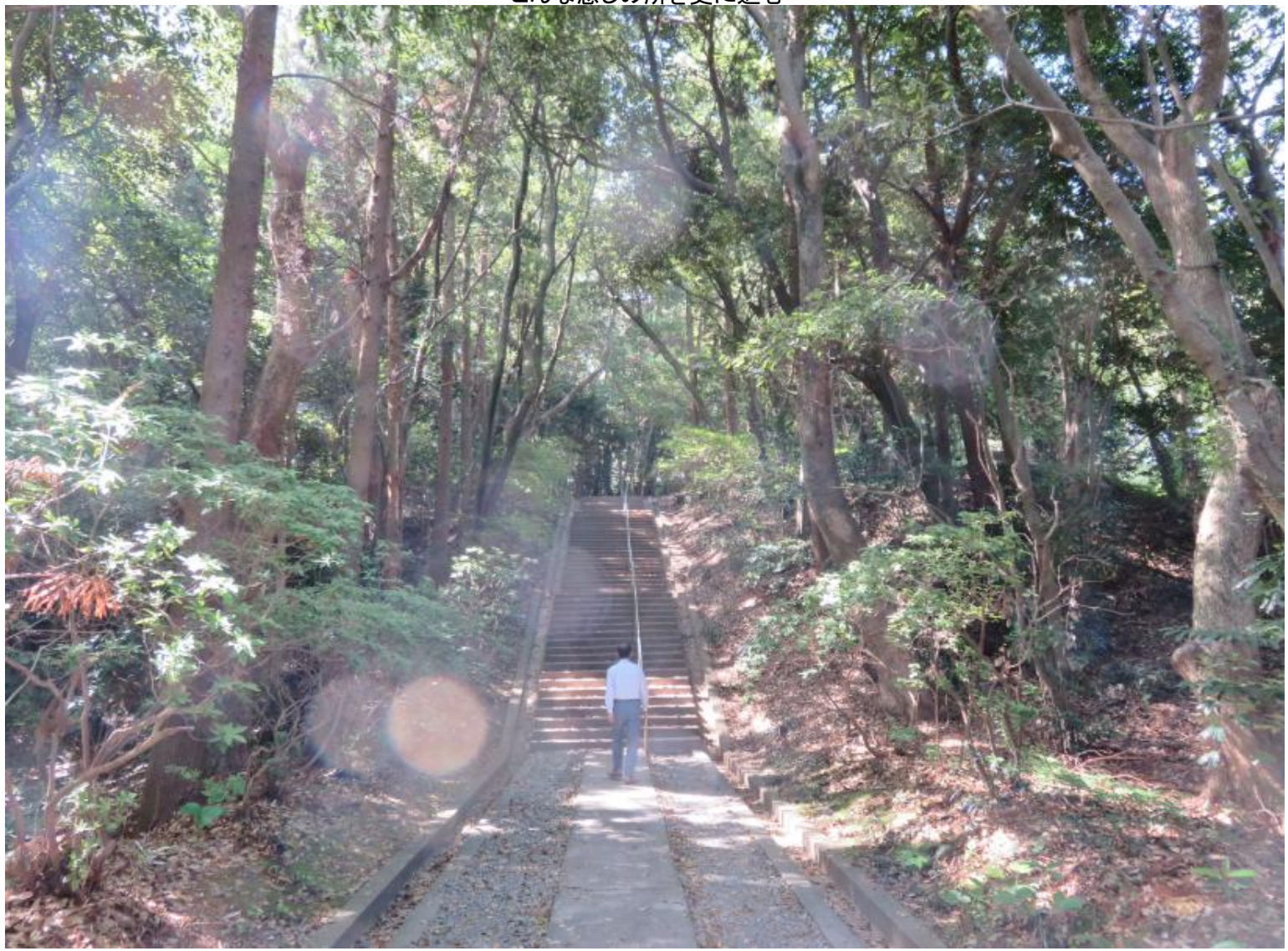
第三宮から第二宮を見たところ

アップで見たところ

さて、ここは高宮祭場への参道

参道を進む/「宗像神社」と記された神額

こんな感じの所を更に進む



左手に説明坂が立っている

高宮祭場

宗像大神（降臨の地）と伝えられ、沖ノ島と並び宗像大社境内で最も神気な場所の一つです

神籬（樹木）を依代としており、社殿が建立される以前の神社祭祀（原上祭祀）を継承する、全国でも稀な静謐に包まれた祈りの空間です。

祭礼日

月次祭　毎月一日・十五日

新年祭　一月一日　午前九時二〇分～

春季大祭　四月二日　午前十一時四〇分～

秋季大祭　十月五日

高宮神幸祭　十月三日　午後六時～

古代祭祀を伝える沖ノ島と高宮祭場

宗像大社社務所

ここが宗像大神降臨の地と伝えられ、沖ノ島と並び宗像大社境内で最も神聖な場所の一つである高宮祭場/神籬（樹木）を依代とし、社殿が建立される以前の神社祭祀（庭上祭祀）を継承する祈りの空間である

前方に高宮の神籬が見える

左手から見たところ

ここが高宮の神籬（ひもろぎ）

宗像大神（宗像三女神）は沖ノ島の沖津宮（長女神＝田心姫神）、大島の中津宮（次女神＝湍津姫神）、そして総社である当地・辺津宮（末女神＝市杵島姫神）にお祀りされ、この三宮を総称して宗像大社と申します。

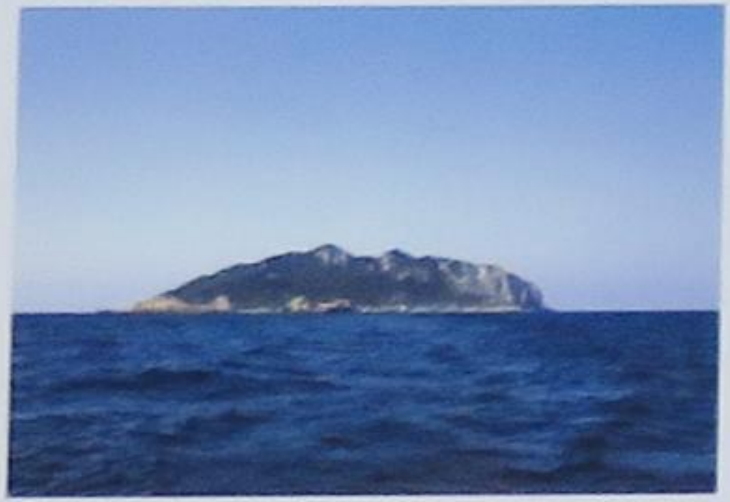
三宮のなかでも、沖ノ島は当大社の神職が交代でたった一人常駐勤務（現在十日間ごとの交代）し、今日も女人禁制や、毎朝海に入っての禊、一木一草一石たりとも持ち出せないなどの掟や禁忌によって厳重に守られている神聖な島です。

その沖ノ島では四世紀末から約六百年間にわたり国家規模の祭祀が行われ、二十三ケ所の祭祀跡が確認されると共に、八万点にもおよぶ神宝（全て国宝）が出土しています。

また現在、全国津々浦々の神社で行われている祭祀（おまつり）は、社殿（本殿や拝殿）で行われていますが、この沖ノ島の祭祀跡から、天上より依代（磐坂・神籬）に神様を降臨願うという、神社祭祀の原点が実証されています。

この沖ノ島で行われた祭祀の姿を色濃く残しているのが、当地の高宮祭場です。古代より連綿と継承される、わが国の祈りの姿に想いを馳せながらご参拝下さい。

沖ノ島の祭祀跡



神の島『沖ノ島』

さて、ここは宗像大社神宝館/沖ノ島の祭祀で用いられた奉献品に加え古文書などの文化財を展示している